Japanese Association of Russian Scholars

ロシア語ロシア文学研究 34（日本ロシア文学会，2002）

2001年度学会報告奨励賞

『巨匠とマルガリータ』におけるブルガーコフの世界観

── フロレンスキーの宇宙論を通した作品分析 ──

大　森　雅　子

ブルガーコフの代表作『巨匠とマルガリータ』(1928-1940) には，彼と同時代の宗教思想家で数学者，また物理学者で芸術学者でもある神父フロレンスキーの著作『幾何学における虚数性』(1922) の影響が見られると言われている。しかしながら，両者の影響関係に関する具体的な研究は皆無に等しい。本稿では，『幾何学における虚数性』で展開されるフロレンスキー独自の宇宙論が，『巨匠とマルガリータ』のプロットとテーマに見出し得ることを明示したい。

1　ブルガーコフと『幾何学における虚数性』

ブルガーコフは1921年にモスクワに上京後，フロレンスキーの『幾何学における虚数性』を手に入れた。ブルガーコフの3番目の妻の回想によると，ブルガーコフはそれを大切に保管し，特に『巨匠とマルガリータ』の執筆時期に何度も読み返していたという。[1] 現に，ブルガーコフはフロレンスキーのテクストの多くの箇所に下線や感嘆符を付していることから，その内容に非常に感銘を受けた様子を窺い知ることができる。さらに，ブルガーコフ自らが，『巨匠とマルガリータ』の構成に戸惑いを感じた人すべてに『幾何学における虚数性』を読むように勧めていたという事実も明らかになっている。[2]

『幾何学における虚数性』は，タイトルからも察することができるように，数学的，物理学的記述に満ちた著作である。次に見ていくように，ロバチェフスキーの非ユークリッド幾何学に基づいた虚数値の物理学的現実性と，アインシュタインの相対性理論を応用した宇宙論が実証されている。こうした難解な著書にブルガーコフが惹き付けられた理由は，次の点にあると考えられる。ブルガーコフはキエフ大学の医学部を卒業し，実際に内戦下で軍医として勤務していた経験があり，自然科学の領域に関する知識は豊富であった。すなわち，『幾何学における虚数性』を理解する素地はあったと言える。またその一方で，ブルガーコフはキエフ神学校の教授である父を持ち，宗教的雰囲気に囲まれて幼少期を過ごしており，不可視的な存在を認める神秘主義的世界観を抱いていた。こうした科学と宗教という二つの傾向を統合し，虚数という世界の不可視的側面の現実性を自然科学によって立証したフロレンスキーの全一的な世界観に，ブルガーコフは共感を覚えたのではないだろうか。

2　『幾何学における虚数性』概要

『幾何学における虚数性』は全9章から成り，前半部分の1章から8章と，後半部分の9章の2つに分けることができる。前半部分では，空間が実数面と虚数面の2つから構成されていることを証明するべく，幾何学に関する計算を多数実践している。後半部分は，前半で行った空間の二面性の幾何学的分析を踏まえ，宇宙空間における虚数圏を実証している。ブルガーコフによる下線や感嘆符，また印は，この9章に非常に多く集中していることから，ブルガーコフは後半部分を特に深く読み込んでいたことが分かる。ここでは，ブルガーコフの下線や感嘆符に注目しながら，9章を概観していきたい。[3]

まず，フロレンスキーは，『神曲』で描かれるダンテとウィルジリウスの旅の軌跡を分析し，ダンテの宇宙がリーマンの球面空間，すなわち非ユークリッド幾何学的な宇宙空間に酷似していることを指摘する。そして，ダンテの宇宙観であるプトレマイオスの天動説が現代の科学で実証されうることを強調し，コペルニクスの地動説を完全に否定する。次にフロレンスキーは，光速について考察する。相対性理論において，光速は秒速30万キロメートルで，それ以上の速度は因果関係が崩壊するとして絶対にありえないとされているが，フロレンスキーはこの原則を打破し，新たな見解を提示する。光速に等しい，あるいは光速を超える時には「我々の地上のカント的な経験を超越した全く新たな存在条件が出現」(49) するとし，そうした新たな世界としての宇宙空間を見出そうと試みる。まず地上の範囲を算出した上で，地上と天上の境界が天王星と海王星の軌道の間にあると断定する。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

プトレマイオスの体系に注目すると，その内部の範囲は赤道の半径も含めると，

$$R=\left(\frac{23\text{時間}3\text{分}56{,}6\text{秒}}{2\pi}\cdot 300000\right)\text{km}$$

となり，〈…〉この範囲がすべての地上の存在を限定していることが分かる。これが**地上の**運動と**地上の**現象の圏であり，このように限定された距離にあり，その向こう側に，質的に新たな世界である**天上の**運動と**天上の**現象の圏，簡単に言えば天上が始まっている。〈…〉天上の運動の圏は，地球と太陽の距離の27.5倍離れたところにある。つまり，その境界は，天王星と海王星の軌道の間にある。結果は驚くべきことである。というのも，このことによって，プトレマイオスとダンテの世界観が数量的にも証明されたからで，世界の境界が太古の昔から認められていた場所にちょうど重なっているのである。(49-50)

こうして，地球を起点にして三つの圏が想定されているが，さらに光速 c と物体の速度 v の関係を加えることによって，三つの圏の物理的特性がそれぞれ明確に示される。[4] まず v<c の時は，地上の現象と等しい。次に v=c は，地上と天上の境界における現象に相当し，以下の特徴が見られる。

地上と天上の境界では，あらゆる物体の長さは0に等しくなり，質量は無限となり，時間は観測される側からでは，無限となる。換言すれば，物体はその長さを失っていき，永遠性に移行し，絶対的な不変性を獲得していく。これは**イデアの**特徴，つまりプラトンによる，非物体的で，長さのない，不変で永遠の本質を物理学の用語で言い換えたものではないだろうか？これはアリストテレスの純粋な形相ではないだろうか？または，これは天の軍勢，つまり地上からは星として観照されるが，地上の特質とは異なったものではないだろうか？ !!! (50)

上の引用は，v=c の物理的特性を述べている箇所ではあるが，「永遠性に移行し，絶対的な不変性を獲得していく」とあるように，v=c を越えた v>c の圏についてもすでに言及され，イデアや形相という哲学用語が v>c の定義として使用されている。v>c の天上圏については，上の引用の直後，具体的に説明される。

境界を越えた v>c の時には，時間は**反対に**流れるので，**結果が原因に先行する**。つまり，ここでは現行の因果律は〈…〉目的論にとって代わられる。〈…〉この時，**物体の長さと質量は虚数となる**。(50)

最後にフロレンスキーは，前半部分で立証された空間の二面性の理論にも触れながら，次のように『幾何学における虚数性』を締め括っている。

虚数圏は実在し，理解し得るものであり，ダンテの言葉では**最高天**と名づけられている。すべての空間は，実数の座標面とそれに一致している虚数のガウス平面から成る**二重のもの**と想定し得るが，実数面から虚数面への移行は，空間の**破壊**と物体それ自体による**反転**を通じてのみ可能である。〈…〉こうして，時間を貫くことで，『神曲』は我々の現代科学に遅れをとるどころか，**先を行くものであること**が思いがけず明らかとなる。！ (51)

フロレンスキーは，『神曲』で描かれた宇宙，すなわち，地球という実数圏を出発し，地獄における反転を経て最高天の虚数圏へと移行を遂げたダンテの旅の軌跡が科学的に実証され得ると考えている。つまり，600年前のダンテの詩的想像力が現代科学の成果に奇しくも合致することを指摘することで，『神曲』の現代性を改めて問い直していると言えよう。

以上，フロレンスキーの宇宙論を概観してきたが，ここで宇宙空間の三圏性に関して注目すべき点がある。それは，フロレンスキーが地上と天上の境界として v=c という圏を想定している点である。物理的特性が異なる二つの圏を仲介する圏 v=c を通過することについて，フロレンスキーは「**この質的な差異を持った圏の間の移行は非連続的とのみ考えうる**」(49) と説明する。すなわち，v<c と v>c という相反する二つの領域が「非連続的」に並立する空間が v=c ということになるが，この v=c にフロレンスキーの思想に特徴的な二律背反性を見出すことができる。フロレンスキー自身，代表的著作『真理の柱と礎石』(1914) の中で，「真理とは二律背反である」[5] と述べていることからも明らかなように，フロレンスキーにとって二律背反はあらゆる存在論を語る上で欠かせないものとなっている。ベセアは，次のように述べている。

フロレンスキーにとって，存在論のあらゆる重要な問題は，二律背反の構造を持っている。彼がイコンについて語るときも，言語について，夢について，創造の過程について，非ユークリッド幾何学について，教会の内部について，またソフィアについて語るときでも，彼の方法は，二つのかけ離れた，いわば自己相殺的な領域を視覚化し，その後悟性に反して，いかにこれらの領域が突如として特別な過渡帯において同じ空間を占めるかということを提示していく方法である。[6]

宇宙空間の三圏性における v=c は，地上と天上という相反する二つの圏を二律背反的に持ち備えた「過渡帯」である。このように，v<c から v>c への移行に際して設定された v=c は，フロレンスキーの思想において特に重要な圏であると言える。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

3 『巨匠とマルガリータ』への適用

『幾何学における虚数性』における宇宙空間の三圏性の理論を『巨匠とマルガリータ』に適用して論じた数少ないブルガーコフ研究者としてアブラハムが挙げられる。アブラハムは，空間の二面性における実数面を小説におけるモスクワ・セクション，虚数面をエルサレム・セクションと位置付け，そこに宇宙空間の三圏性の理論を組み合わせることで，実数圏（v<c）をモスクワ，虚数圏（v>c）をエルサレムと見なしている。[7] モスクワ・セクションが地上圏であることに疑問の余地はないが，エルサレム・セクションが天上圏 v>c であるという主張は再考を要すると思われる。エルサレム・セクションには，虚数圏に特徴的な現象は描かれていないからである。

しかし，アブラハムによる v=c の位置付けは評価したい。アブラハムは，マルガリータの光速飛行と悪魔の大舞踏会における 0 の時間を，悪魔の大舞踏会が v=c に相当する理由として挙げている。[8] それでは，v>c をいかに見出すべきか。『巨匠とマルガリータ』研究において，歴史を終末に向かう聖なるプロットとして考える黙示録的歴史観が小説に反映されていることがしばしば指摘される。[9] 小説に見られる黙示録的歴史観は，フロレンスキーの宇宙論，つまり地上から天上への移行という一定の方向性を持った理論と重なり合うと考えられる。そこで，小説における v>c を再考するにあたって，その前段階である v=c の位置付けの意義を改めて検証する。

4 悪魔の大舞踏会と v=c

悪魔の大舞踏会の場面には，アブラハムの指摘する v=c の時間的な性質の他に，地上圏を越えた宇宙という空間的な特徴に一致する描写が存在する。例えば，舞踏会の会場には，「片側が太陽の光で照らされている」[246] 地球儀が置かれ，マルガリータはその地球儀を外側から覗き込んでいる。また，「巨大な黒いネプチューン（海王星）が大きな口から幅の広い薔薇色の流れを噴き出して」[263] いる。海王星は，フロレンスキーが v=c の位置付けに際して言及した惑星であった。さらに，無限の広さを持つ舞踏会会場は「五次元」[243] 空間であると悪魔が説明する場面がある。この用語はフロレンスキーによる v=c の定義にはなかったものの，広大な宇宙空間を彷彿とさせる時空間として，ブルガーコフが独自に v=c の特性に付与したものと考えられる。[10]

以上のことから，悪魔の大舞踏会は v=c の時空間において行われたと断定できるが，次にその位置付けの意義について考察する。ここで，悪魔の大舞踏会は中世ロシアの伝説である聖母マリアの地獄降りのパロディーであるという研究者の指摘[11] に注目したい。聖書外典文学の一つである聖母マリアの地獄降りは，聖母マリアの苦悩の遍歴とも呼ばれ，カトリックやプロテスタントにはない東方正教独自の伝説である。聖母マリアの地獄降りとは，地獄で罰せられて苦しむ数多くの罪人たちを見て憐憫の情を抱いたマリアが，罪人の責苦をやめるように神に懇願すると，最終的にマリアの慈悲が神に聞き入れられるという内容のものである。[12] 聖母マリアの地獄降りと悪魔の大舞踏会の間には共通点が多数存在する[13] が，なかでも地獄降りのテーマであるマリアの慈悲と地獄における救済について取り上げたい。悪魔の大舞踏会において，マルガリータは嬰児絞殺者のフリーダという罪人に対して憐憫の情を抱き，悪魔にフリーダ救済を懇願する。しかし，悪魔はこの救済に関与せず，マルガリータ本人に任せることにする。

> 「フリーダ！」マルガリータが甲高い声で叫んだ。
> ドアが開け放たれると，髪を振り乱し，裸ではあるが，すでに酔っ払った様子の全くない女が狂おしい目で部屋に駆け込んできて，マルガリータに両手を差し伸べたが，マルガリータは威厳をもって言った。
> 「おまえは許される。もうこの先，ハンカチが置かれることもない」
> フリーダの号泣が聞こえ，彼女は床にうつぶせに倒れると，マルガリータの前で十字架のように横たわった。ヴォランドが片手を振ると，フリーダは目の前から消えた。[275-276]

罪人フリーダは，地獄降りにおけるマリアの慈悲に相当するマルガリータの憐れみの心によって救済のきっかけを与えられ，許されている。フリーダが許された瞬間に「十字架のように」倒れ，視界から消えたという象徴的な描写は，地獄において救済され，v>c の天上へ移行したことを意味していると思われる。

聖母マリアの地獄降りと悪魔の大舞踏会に共通する特徴として重要なのは，地獄における罪人が未来永劫罰せられることなく，自らの罪から解放され，救済される可能性を持っている点である。こうした普遍救済説として，3 世紀のギリシア教父オリゲネスが唱えたアポカタスタシスという神学説が挙げられる。アポカタスタシスとは，万物が終末を迎える時，あらゆる人も，世に潜在する悪，そして悪魔も救済を受け，万物

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

が神に帰一するという神学説である。[14] キリスト教の終末論の見解には，地獄を永遠に続くものと考える立場と，最終的には悪魔も含めて全世界が救済されるとするアポカタスタシスがある。アポカタスタシスにおいて，地獄とは空間的な存在ではなく，罪の汚れを取り除く「苦しい治療」[15] を受けるプロセスを意味し，個々人の罪によってその苦しみの程度や存続期間は異なるとされている。[16] この神学説は6世紀に異端説とされたが，東方教父の間では潜在的に認められてきた。[17] ロシアにおいては，19世紀末から20世紀初頭の宗教思想家の間で復興した。[18]

舞踏会でフリーダを救済したマルガリータもまた，罪の浄化のプロセスとしての地獄を体験している。「嘘をつき，夫を欺き，人目を忍んで秘密の生活を送っていたこと」[212] を自らの罪と感じているマルガリータは，悪魔によって招待された場で「ひどい報いを受けることになる」[221] と予感しながらも，そこで巨匠をめぐる苦悩が消滅することを確信して，肉体的，精神的な苦しみに耐えていく。舞踏会の間，マルガリータには首にかけられた重い鎖や，死人からひっきりなしに接吻される手足の痛みによって，耐え切れないほどの苦しみを与えられるが，「血のシャワー」[262] を浴びせられることでマルガリータは元気を取り戻している。これは，キリストの血によって罪が洗い流されるという罪の浄化を象徴的に表している。[19] そして「苦しい治療」に耐えたマルガリータは，念願の巨匠との再会によって狂喜するが，これは v=c の地獄を通過し，v>c の天上へ移行する準備が整ったことを意味していると言える。

このように，悪魔の大舞踏会はマルガリータやフリーダが救済されるための地獄 v=c となっているが，その一方で，ベルリオーズには「非存在」という永遠の死が悪魔ヴォランドによって宣告される場としても機能している。

> 「〈…〉どんな理論にも背反するものがあるのです。〈…〉あなたは非存在に立ち去りますが，私は盃と化すあなたで存在を祝しながら乾杯できて愉快です！」[265]

つまり，悪魔の大舞踏会は，罪人の救済と永遠の死が二律背反的に並立する「過渡帯」としての地獄であると言えるが，こうした地獄の二律背反性は，フロレンスキーの思想においても見出せる。フロレンスキーは『真理の柱と礎石』の第8の手紙「ゲヘナ」において，「テーゼは，普遍救済の不可能性が不可能であること，そしてアンチテーゼは，普遍救済の不可能性が可能であることで，これらは明らかに二律背反的である」[20] と述べ，地獄における二つの可能性を相容れない状態のまま提示している。

ところで，マルガリータが v=c の悪魔の大舞踏会によって救済された一方で，愛人の巨匠は悪魔によって精神病院から救出されたにもかかわらず，「月明かりの夜にも，私には安らぎはない」[279] と嘆き，舞踏会終了後も心の傷は癒えることはない。つまり，舞踏会はマルガリータ個人にとっての「苦しい治療」であり，巨匠にとっての地獄は別に存在することになる。次に，巨匠にとっての v=c，すなわち天上 v>c へ移行するプロセスとしての地獄を検証する。

5　ピラトの地獄と v=c

小説の第32章において，巨匠とマルガリータは土曜日の夕刻に悪魔と共にモスクワを飛び立ち，途中でピラトが2000年間苦悩する場である「石だらけのわびしい平坦な頂」[369] に立ち寄り，ピラトを解放する。この場面については，キリストの地獄降りという正教において重要な位置を占めるテーマが下敷きになっているという指摘がある。[21]

キリストの地獄降りとは，キリストが死後，復活に至るまでの3日間に地獄に降り，地獄の扉を打ち破って，キリスト到来を待ち望む旧約時代の義人や聖人らを引き上げるというものである。また，キリストの地獄降りのイコンは，別名「復活のイコン」とも呼ばれ，数あるイコンの中でも正教会では中心に据えられるべき地位にあるものである。打ち壊された地獄の扉に足をかけ，アダムの手を取って起こそうとするキリストの姿がさまざまなバリエーションをもって描かれている。[22] キリストは，地獄の闇を圧倒する光背と共に描かれるが，これは来るべき復活の光明と夜明けを意味している。[23]

小説の第32章において，ピラトは次のように苦悩の場から解放される。

> 「お前は自由だ！自由だ！彼がお前を待っているのだ！」
> 山々は巨匠の声を雷鳴に変え，雷鳴は山々を破壊した。呪わしい岩壁は崩れ落ちた。石造りの肘掛椅子のある一角だけが残った。〈…〉この庭園の方に向かって真っ直ぐに，総督が長いこと待ち望んでいた月光の道が伸びてきて，耳のとがった犬が真っ先にその道を駆け出した。〈…〉見えたのはただ，彼もまた忠実な番犬の後を追って，月光の道をひたすら駆けて行ったことだけである。[370-371]

巨匠のかけ声によってピラトの苦悩の場が崩壊したことは，キリストが地獄の扉を打ち破って，救済への道を切り開いたことに相当する。また，月光の道は復

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

活のイコンで描かれるキリストの光明と同様の意味を持っていると考えられることから，ピラトはキリストが投影された巨匠によって地獄から救済されたことになる。つまり，キリストの地獄降りが反映された第32章の地獄において，ピラトは2000年にわたって権力者としての臆病の罪を償い終えたと言える。このピラト救済の場面に，悪魔の大舞踏会と同様，罪の浄化のプロセスとしての地獄 v＝c が見出せる。

先に述べたように，地獄としての悪魔の大舞踏会は，フリーダの救済と同時にマルガリータ本人も救済される場であった。第32章の地獄もまた，ピラトのみならず，ピラトを解放した巨匠も自らの罪が浄化される場となっている。巨匠の罪は，ピラトについての小説に起因する。巨匠はその小説が招いた受難に屈したため，小説は未完成のままである。巨匠はこうした芸術家としての罪を抱えたまま，ピラトの地獄に臨むことになる。しかし，ヴォランドに「さあ，これであなたは，あなたの小説をひとつの文章で締め括ることができるでしょう！」[370] と促され，巨匠が「お前は自由だ！」と発することで，小説は完成する。ピラトの地獄を通過した後には，巨匠の「不安に満ちた，何本もの針に突き刺された記憶は消え始め」[372] ている。したがって，巨匠は v＝c を経て救済されたと言える。

ピラトの地獄には，v＝c の物理的特性も見出される。まず，0の時間，すなわち時間の停滞について考察する。第32章の地獄におけるピラトは，2000年前のエルサレム・セクションでヨシュア処刑後に苦悩するピラトの描写に重なり合う。

［第32章］
椅子に座っている盲人のように思えた男が掌を軽くこすり合わせ，まさにその見えない目で丸い月を凝視しているのをマルガリータは見ていた。〈…〉重々しい石造りの肱掛椅子の傍らには，黒くて大きな耳のとがった犬が横たわり〈…〉座っている男の足元には砕けた水差しの破片が散らばり，黒ずんだ赤い水溜りが乾くことなく広がっている。[369]

［エルサレム・セクション第25章］
総督の足元には，まるで血のように赤い水溜りが片付けられることなく広がっていて，割れた水差しの破片が散らばっていた。〈…〉水溜りはそのまま残った。[291]

［エルサレム・セクション第26章］
寝椅子には総督が横たわっていた。〈…〉その傍らにはバンガが眠っていた。[321]

砕けた水差しの破片と葡萄酒の赤い水溜りや，ピラトの傍らに横たわる愛犬バンガが両場面に現われることで，ピラトの地獄では時間の進行が見られなかったと捉えられる。

また，v＝c の特徴として，宇宙空間に存在する時空間であることが挙げられたが，それは巨匠らがモスクワを出発後，ピラトの地獄に至るまでの飛行の描写に現われている。

こうして長いこと沈黙のうちに飛び続けていると，やがて眼下の地形自体も変化し始めた。物悲しい森は大地の闇に沈み，鈍く光る河の刃もその後に続いて連れ去られた。眼下に丸石が現われ光を反射し始め，ところどころに月光の届かない窪地が黒々と見えていた。[369]

マルガリータが v＝c の悪魔の大舞踏会に向かった時と同様に，主人公らも空を飛行し，地上空間を眼下に見下ろしながら，ピラトの地獄である v＝c の圏へ到着する。

さらに，このピラトの地獄については，「過渡帯」としての v＝c という観点からの考察も可能である。

〈…〉光り輝く偶像が君臨している巨大な町（エルサレム―引用者）が照らし出された。〈…〉総督が長いこと待ち望んでいた月光の道が真っ直ぐに伸びてきて，耳のとがった犬が真っ先にその道を走り出した。〈…〉唯一見えたのは，彼（ピラト）もまた忠実な番犬の後を追って月光の道をひたすら駆けていったことだけだった。
「彼の後を追って，私もあちらへ？」巨匠は手綱を引き，不安そうに尋ねた。
「いいえ」ヴォランドは答えた。〈…〉
「ということは，つまり，あちらへ？」巨匠は尋ねると，振り返って，先程見捨ててきた修道院の砂糖菓子に似た塔や窓ガラスの中に粉々に砕かれた太陽の町（モスクワ）が織り成されている後方を指さした。[370-371]

地獄周辺において，ピラトが駆け上がった天上 v＞c とモスクワやエルサレムといった地上 v＜c が並立的に描かれている。つまり，地上と天上を非連続的に仲介する圏 v＝c が，第32章のピラトの地獄にも位置付けられていることがここで改めて明らかとなる。

6 『巨匠とマルガリータ』における v＞c

第32章の v＝c を通過した巨匠とマルガリータは，「真夜中の月の後すぐに始まった」[372] 夜明けを迎え，「永遠の隠れ家」[367] へと歩みを進める。v＝c に見られた時間の停滞はここで打破され，次に永遠の本質を持ったイデアとしての隠れ家がマルガリータによって語られる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

「聞いて楽しむのよ，人生であなたに与えられなかった静寂を。ご覧なさい，ほらこの先に，ご褒美として与えられた永遠の家があるわ。〈…〉あなたにも分かるでしょう，蠟燭が燃える時どれほどの光が部屋に満ちるか。あなたはあの使い古した永遠の帽子をかぶって眠りにつくの，あなたは口元に微笑みを浮かべながら眠りにつくことでしょう」[372]

この永遠の隠れ家に対置されるのは，地上のモスクワにおける巨匠の住居である。そこは「秘密の隠れ家」[139] あるいは「地下の隠れ家」[141] と呼ばれ，主人公らにとって心地よい空間であったが，ピラトの小説が非難されたことによって破滅の場と化していく。この後，地上の隠れ家は，主人公らがモスクワを去る際に悪魔によって火が放たれ，焼失する。モスクワの隠れ家は，永遠の隠れ家とは対照的に，内的にも外的にも時間的な変化を遂げている。つまり，この二つの隠れ家の間には，イデアの圏 v>c とその影としての圏 v<c の関係が成り立っていると言える。

v>c の天上は，フロレンスキーによれば「結果が原因に先行する」圏であったが，永遠の隠れ家の場面においてその特徴が認められる。主人公らは，各々の v=c の地獄を越え，日曜日の復活祭に永遠の隠れ家に到着し，復活という永遠の生が授けられる。復活とは，現世での死が来世での永遠の生をもたらすという，いわば地上の因果律に逆行した現象であり，この現象が反映された第 32 章の最後の場面は v>c に相当する。[24]

v>c は，小説本文終了後のエピローグにも描かれている。巨匠の弟子となったイヴァンの夢にヨシュアとピラトが登場し，ヨシュアの処刑をめぐる二人の対話が続く。

彼（ピラト―引用者）の隣でぼろぼろに裂けた長衣を着て，顔が醜く歪んだある若者（ヨシュア）が歩んでいる。〈…〉「なんと下劣な処刑だ！だが頼む，言ってくれ」傲慢な顔が哀願するような顔に変わる。「あんなものはなかったのだな！　お願いだ，言ってくれ，なかったのだろう？」「そう，もちろん，なかった」としわがれた声で道連れは答える。「あれはお前の気のせいなのだ」[383]

イヴァンの夢における二人の対話の内容は，実際のエルサレム・セクションでの出来事と矛盾する。地上圏のエルサレムにおいて，ヨシュアの処刑は揺ぎ無い事実とされ，ヨシュアの死は覆ることはない。しかし，エピローグにおいて拷問で顔の歪んだ処刑前のヨシュアが登場したことで，執行されたはずの処刑は存在しなかったことになり，ここに因果律の逆行が生じる圏 v>c を指摘することができる。因果律が逆行することによって，ピラトの過去の罪は消滅することになる。これは，フロレンスキーの罪の許しについての思想とも響きあう。フロレンスキーは『真理の柱と礎石』の第 8 の手紙「ゲヘナ」で贖罪について取り上げ，その際 7 世紀の修道士シリアのイサクの言葉を引用している。

「人が自らの贖罪を得たと認識するのはいつだろうか」という質問に対して，シリアのイサクは次のように答えている。「〈…〉過ぎ去ったことに逆行する方向性を公然と自らに与える時である」[25]

エピローグの最後の場面では，ヨシュアとピラトの会話に引き続き，巨匠とマルガリータも月光に包まれて登場し，イヴァンの元にやって来る。

イヴァン・ニコラエヴィッチは夢の中で彼（巨匠―引用者）に両手を差し伸べ，必死になって尋ねる。
「それじゃ，つまり，これで終わったのですね？」
「これで終わったのだよ，私の弟子よ」と 118 号（巨匠）は答えると，女（マルガリータ）がイヴァンの方へ近寄り，言う。
「もちろん，これでね。すべては終わったし，すべては終わる〈…〉」[384]

「これで終わり」とは，ヨシュアとピラトの間で交わされた「処刑はなかった」という因果律に逆行した結論に，巨匠とマルガリータも同調していることを意味する。こうして，ヨシュアとピラト，そして主人公の二人は，v>c の天上圏に移行していたことがエピローグで改めて確認される。

以上のように，小説における v>c の天上圏は，第 32 章の永遠の隠れ家とエピローグのイヴァンの夢の双方に反映されている。特にエピローグの v>c は，地上からのイヴァンの視点によって相対化されることで，因果律の逆行がいっそう鮮明に現出していると言えるだろう。

7　最後に

ここまで，フロレンスキーの宇宙空間の三圏性を，巨匠とマルガリータ，またピラトの罪の浄化と救済の軌跡に沿って適用することで，小説の新たな思想的背景を明らかにしてきたが，こうした救済のテーマは『巨匠とマルガリータ』で初めて取り上げられたわけではない。既にブルガーコフの処女長編『白衛軍』(1923-1924) において，このテーマは宇宙への眼差しと共に現われている。『白衛軍』の最後の場面では，「すべては過ぎ去る」という黙示録のフレーズが引用

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

され，「罪深い，血まみれた，雪に覆われた大地」から「星々の残る」永遠の世界への眼差しが描かれ，終末のカタストロフィーを越えた新生が天上に存在することが述べられる。[26] また，『白衛軍』第1部において，主人公の軍医トゥルビンの夢に，天上で救済された曹長のジーリンが登場し，神や使徒ペトロのいる天上の様子を語る場面がある。そして，後の戦いで戦死することになる赤軍の兵士たちが天上で救済されることが予言的に語られる。[27] ここでは，主人公にとって敵軍のボリシェヴィキでさえも天上で救済されるという普遍救済の可能性が示唆されている。このように，既に『白衛軍』において天上の救済について言及されているものの，地上での罪が浄化され，天上で救済されるまでのプロセスに関する記述はない。『巨匠とマルガリータ』において，ブルガーコフがv<cからv=cの地獄を経て，v>cに至るプロセスに沿う形で主人公らの運命を描いたのは，『白衛軍』執筆当初からブルガーコフが関心を抱いていた罪の許しや救済，また復活といった終末論的なテーマが，『幾何学における虚数性』の宇宙空間の三圏性によって科学的かつ明快に説明され得ることを理解し，生涯最後の小説においてフロレンスキーの宇宙論に補完された自らの世界観を具現化したからではないかと考えられる。

（おおもり　まさこ・東京大学大学院）

注

『幾何学における虚数性』の引用は *Флоренский П.* Мнимости в геометрии. М.: Лазурь, 1991 により，（　）内に頁数を記す。尚，引用部分のゴシック文字は，フロレンスキーによる強調部分である。また，下線と感嘆符はブルガーコフによるもので，囲み線の語句は，ブルガーコフがさらに印をつけた箇所を示す。翻訳は大森による。

『巨匠とマルガリータ』の引用は *Булгаков М.* Собр. соч.: В 5-ти т. М.: Художественная Литература, 1990. Т. 5. により，［　］内に頁数を記す。

訳出にあたっては，『巨匠とマルガリータ』水野忠夫訳，集英社ギャラリー［世界の文学15］ロシアIII，1990と『巨匠とマルガリータ』（上）（下）法木綾子訳，群像社，2000を参照した。点線による強調は大森による。

1 *Чудакова М.* Условие существования // В мире книг. 1974. No. 12. С. 80.

2 *Кораблев А.* Тайнодействие в «Мастере и Маргарите» // Вопросы литературы. 1991. No. 5. С. 52.

3 ブルガーコフによる下線や感嘆符等の箇所については，*Abraham P.* Роман《Мастер и Маргарита》М. А. Булгакова. Brno. Masarykova Univerzita v Brne, 1993. С. 129-131 を参照した。

4 フロレンスキーは次の数式を用いることで，各圏の物理的特性を規定している。

$$\beta=\sqrt{1-\frac{v^2}{c^2}} \quad (50)$$

相対性理論によれば，静止系から動く物体を観測した時に，物体の速度はゆっくりと進み，物体の長さは縮むように見えると言われている。こうした時間の遅れや物体の収縮についての公式に，フロレンスキーの用いた数式が含まれている。つまり，βが実数（v<c）か，0（v=c）か，虚数（v>c）かによって，時間や物体の長さが必然的に導き出されることになる。

5 *Флоренский П.* Столп и утверждение Истины (I). М. : Правда, 1990. С. 147.

6 *Bethea D.* Florensky and Dante: Revelation, Orthodoxy, and Non-Euclidean Space. // Russian Religious Thought. Edited by Kornblatt Judith Deutsch and Gustafson Richard F.. Madison. The University of Wisconsin Press, 1996. P. 115.

7 *Abraham P.* Роман «Мастер и Маргарита» М. А. Булгакова. С. 133-138.

8 Там же. С. 128-132. マルガリータは「奇跡的な速度で」［234］飛行した後，舞踏会会場に到着する。また，真夜中0時に始まった舞踏会は，終了後も真夜中のままであったという0の時間が，v=cの特性と一致する点をアブラハムは指摘している。

9 例えば，*Ericson E.* The Apocalyptic Vision of Mikhail Bulgakov's Master and Margarita. New York. Edwin Mellen Press, 1991 や *Bethea D.* The Master and Margarita: History as Hippodrome // The Shape of Apocalypse in Modern Russian Fiction. Princeton. Princeton U.P., 1989 を参照。

10 ブルガーコフは「五次元」について，戯曲『至福』（1929-1934）でも言及している。タイムマシンを製作した技師は次のように述べている。「時間は虚構であって，過去も未来も存在しないことをあなたにどうやって説明したらいいでしょう…。例えば，五次元を持ち得る空間についての考えを，あなたにどうやって説明したらいいでしょうか？…」（*Булгаков М.* Собр. соч.: В 5-ти т. М.: Художественная Литература, 1990. Т. 3. С. 386.）ブルガーコフにとっての「五次元」空間とは，単に空間的な広がりを指しているのではなく，ミンコフスキーやアインシュタインが唱えたような，時間を空間の新たな次元として組み込んだ時空連続体を意味していると思われる。

11 *Ericson E.* The Apocalyptic Vision of Mikhail Bulgakov's Master and Margarita. P. 32.

12 *Zenkovsky S.* Medieval Russia's Epic, Chronicles, and Tales. New York. E. P. Dutton and Co., 1963. P. 122-129.

13 聖母マリアの地獄降りは，キリストの十字架上の死から復活までの間に行われるが，悪魔の大舞踏会は，エルサレム・セクションでヨシュアが処刑された金曜日の深夜に開始されている。また地獄降りで，マリアのガイド役として罪人の罪歴を披露していく大天使ミハイルの役割を，悪魔の大舞踏会では悪魔コローヴィエフが滑稽に演

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

じている。さらに，地獄降りで登場する罪人の中に皇帝や毒殺者，嬰児絞殺者がいるが，こうした罪人は悪魔の大舞踏会においても客として参加している。

[14] 秋山学「ビザンティン思想における終末論」，『地中海終末論の誘惑』蓮實重彦，山内昌之編，東京大学出版会，1996．71-72頁．

[15] オリゲネス『諸原理について』小高毅訳，創文社，1978，185頁．

[16] *Daley B.* The Hope of The Early Church: A Handbook of Patristic Eschatology. Cambridge, New York, Port, 1991. P. 57.

[17] 秋山学「ビザンティン思想における終末論」，72頁．

[18] 例えば，セルゲイ・ブルガーコフはアポカタスタシスについて次のように述べている。
「責苦の中にあたかも教育的であるかのような一時的な魂に対する治療薬を見出し，アポカタスタシスという最終的な復興を望むことで，昔から責苦の永遠性に疑問が表明されてきた。〈…〉この問題は，今後の議論や教会の聖霊から賜る新たなひらめきに対して閉ざされてはいないと言える。」（*Булгаков С.* Православная эсхатология // Православие: Очерки учения православной церкви. Paris. YMCA-PRESS, 1985. С. 388-389.）
また，フロレンスキーも普遍救済の希望について言及している。
「現在では，ほとんど全ての人の心の中に，神による最終的な許しに対する秘めたる確信というある種の簡略化されたオリゲネス主義が忍び込んでしまったということを知らない者はいるだろうか？」（*Флоренский П.* Столп и утверждение Истины (I). С. 208.）

[19] *Ericson E.* The Apocalyptic Vision of Mikhail Bulgakov's Master and Margarita. P. 119-120.

[20] *Флоренский П.* Столп и утверждение Истины (I). С. 209.

[21] *Круговой Г.* Гностический роман М. Булгакова // Новый журнал. 1979. No. 134. С. 77.

[22] 森安達也『東方キリスト教の世界』山川出版社，1991，245頁．

[23] *Ouspensky L., Lossky V.* The Meaning of Icons. New York. St. Vladimir's Seminary Press, Crestwood, 1989. P. 188.

[24] 『巨匠とマルガリータ』研究において，「光」に値せず，「安らぎ」に値する巨匠の来世についてしばしば議論の対象となるが，フロレンスキーの宇宙論を適用することで，主人公の二人が天上 v>c に移行したと解釈し得る。但し，小説における v>c は，フロレンスキーの定義にあったような『神曲』の最高天という限定的な天上としての「光」ではなく，「安らぎ」を含んだより広い意味での天上であると言える。

[25] *Флоренский П.* Столп и утверждение Истины (II). С. 722.

[26] *Булгаков М.* Собр. соч.: В 5-ти т. М.: Художественная Литература, 1989. Т. 1. С. 427-428.

[27] Там же. С. 233-237.

Масако ОМОРИ

Миропонимание М. Булгакова в романе «Мастер и Маргарита» : Анализ романа с точки зрения космологии П. Флоренского

В критике нередко отмечается, что работа Флоренского «Мнимости в геометрии» оказала большое влияние на роман «Мастер и Маргарита». Однако до сих пор роман почти не анализировался с этой точки зрения. В данной статье будет показано, как Булгаков воплотил космологию Флоренского в своем последнем романе.

В «Мнимостях в геометрии» Флоренский разделяет космическое пространство на три сферы. Первая — действительная область(v<c). Вторая — раздел Неба и Земли(v=c). Третья — мнимая область небесных явлений(v>c), где «время протекает в обратном смысле, так что следствие предшествует причине», а «длина и масса тел делаются мнимыми». Флоренский связывает эту мнимую область с «миром идей» Платона.

Как указывает П. Абрагам, «великий бал сатаны» действительно находится на v=c. Думается, эта сцена была введена автором и для описания искупления вины Маргариты. Как отмечают исследователи, эпизод бала сатаны имеет сходство с апокрифом о Богородице, сошедшей в ад, чтобы спасти страдающих грешников. На балу Маргарита спасается через очищение и возносится в рай, на Небо(v>c) по теории апокатастасиса.

Ад для мастера изображается в эпизоде, где Пилат страдает от своей вины в течение 2000 лет. Г. Курговой отмечает, что в этой сцене отражена апокрифическая легенда «Сошествие Иисуса в ад». Здесь пребывание в аду описано как процесс искупления вины Пилата и вознесения его на Небо. Однако этот ад — не только для Пилата, но и для мастера. Проходя через ад, он также обретает духовное освобождение. Интересно отметить, что Булгаков изображает Пилатов ад, используя характеристики сферы v=c.

Пересекая область v=c, мастер и Маргарита входят в «вечный приют». Здесь появляется новая сфера v>c. Для героев этот приют представляется как идея. Они появляются там в пасхальное воскресение. В этот день им обещана вечная жизнь, за которую на земле надо заплатить смертью, в чем и проявляется обратная причинность. К области v>c относится и одна сцена в эпилоге. Во сне Иван видит Пилата и Иешуа (а также мастера и Маргариту), подтверждающих, что казни Иешуа не было. Обратная причинность заметна и здесь. Таким образом, все герои, пройдя через все три сферы, оказываются в последней — на Небе.

NII-Electronic Library Service